

淨土

1976 - 4



昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受承認雜誌）第三二五号
昭和五十一年三月二十五日印刷 昭和五十一年四月一日発行
第四十二卷 第四号

S. KUT

獨立自尊

順
芸



獨立自尊

大谷隆雄

(正福山主)

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の言葉で有名な『学問のすすめ』の著者福澤諭吉翁が生涯をかけて力説したものは学問の独立のみに限らず、人生のすべてにおいて「独立」の一事であった。諭吉翁の生涯は「獨立自尊」の実践であった。この言葉は明治三十三年に公にされた『修身要領』に「心身の獨立を全うし自から其身を尊重して人たるの品位を辱めざるもの、之を獨立自尊の人と云ふ」、又「自から勞して自から食ふは人生獨立の本源なり。獨立自尊の人は自勞自活の人たらざる可らず」と記されている。明治の時代に一身一国の獨立を念じ一個人獨立の健全な市民の誕生を期した福澤諭吉翁の先覺者たる真髓を見ることが出来る。積尊の降誕の偈「天上天下唯我独尊」と同じ無限の意味を感じている。

四
月
号



目
次

病床に覺ゆる往生極楽の風光……………	小川金英……………	(2)
△法話△花まつり……………	後藤真雄……………	(5)
御忌会によせて すみぞめの祖師をしいつつ……………	金田明進……………	(8)
現代とこころのシリーズ③……………		
『スポーツ』のこころ……………	岡野功……………	(12)
『茶』のこころ……………	三浦純亭……………	(16)
『写経』余韻……………	静永孝英……………	(19)
常光寺と福沢諭吉……………	大谷寿雄……………	(24)
浄土教の流れ△四△引くと押すのちがい……………	竹中信常……………	(29)
法数術語十二ヵ月(四月の巻)……………	宝田正道……………	(34)
新刊紹介『仏教的生き方とは?』(浄土選書1)……………		(37)
念仏ひじり三國志(二十四)法然をめぐる人々……………	寺内大吉……………	(38)

表紙 久住 静雄画

カット 大正大学美術部



病床に覚ゆる

往生極楽の風光

小川 金英
おがわ きんえい

(浄土宗第二教化センター委員長
大本山増上寺顧問)

「往生極楽のためには、あるいは往生するぞ
と思いついて」等、往生、往生と往生をめざ
してただひたむきに専修念仏の信行をすすめ
られた法然上人の教えは、当時の成仏を求め
る修行仏教に対して、新しい仏教の開頭を示
されたものです。これは、成仏仏教から救い
の仏教への一大宗教革命であり、まさに日本
仏教の誕生となったのです。こうした真の人
間宗教として発足した浄土教が、今日ややも
すれば極楽往生の宗教として、現生には無関

係な死後の教えであり、老人の気休めぐらい
に思われ、往生の語さえ曲解されて用いられ
ているようです。往生極楽という三世を貫く
浄土の教えが、何故今日の大衆教化の上に強
調できなかったのでしょうかと、私自身反省
と慚愧の思いに深い責を感じております。

私は昨夏からリウマチを患い入院しており
ますが、私の病室からの線香の香りが廊下に
まで流れるらしく、——とても良い香りです
ことと喜んで下さる人、病室に香を焚くなど

縁起でもないといやがる人、また念仏すると病いが治るのか、どんな利益があるのかなどと様々な質問さえ受けました。もとより、病いに苦しむ人達の思いとしては当然の間と思えますものの、これはあまりにもその場しのぎの現世利益の追求なのです。不況時代には神仏詣が多いとか、今年の元朝詣が近年かつてない程大勢であったとか、またおみくじや占いが大繁昌しているとか、——これが昨今のあり様です。自分に都合よければ神仏のお護りと喜び、都合が悪く出ると神も仏もあるものかというわけです。こうした宗教心とはいえない風潮が病院の中にも見られます。

今日、浄土教化者の中にも、ややもすれば往生浄土を表に出さず、念仏の不求自得の利益で諸難諸苦も除かれる等々、現世利益的な面を強調して念仏を説いているお方もあるようです。もちろん、法然上人は現当二世の護念を示しておられます。それは教化の過程としては良い方便とも思われますが、しかし法

然仏教はやはり、「往生のためには南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞ」と思い取りて申す外には別の子細なし」という旗印なのです。これをズバリと表に出していいのではないのでしょうか。そこにこそ現世も当然救われる道だと思っています。

親子相喰む激しい戦塵、飢えと病いに恐慌していた当時、人心に安らぎと励みを与えられたのが念仏の教えであつたはずです。この教いの教えが時の仏教界に大きな波紋を投げかけ、ついに洛北大原の勝林院に南都北嶺の碩学が集まり、念仏の価値判定が論じ合われたのです。その時上人は、「学問の上では互角であるが、機根相應の教えでは源空勝ちなり」と自信をもって述べられたということです。その証左に、参席の碩学が諸共に三三三晩の念仏行道を行ない、大原の林に念仏の声がかどましたといわれます。また源氏の荒武者熊谷直実運生が、上人に帰依し、「限りない悪業を重ねた私如き者は、手も足も目も耳

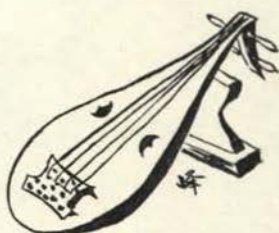
も切り取らねばと思ひしに、ただこのままで念仏だに申せばや」と、地に伏して号泣したということです。まことに尊いことと偲ばれます。

極惡底下の私達には、教理教論がいかに高遠でも、足なえて歩み得ぬ者には、それは天上の花でしかないのです。御法語にも、「我れ戒定慧三学の器にもあらず。しからばいかして解脱するを得んや。悲しいかな、悲しいかな、いかにせん、いかにせん」とあります。絶望のどん底にあって、この機のままお救い下さるみ光を発見されたのが、選択本願往生浄土の念仏であつたわけです。三毒にまみれた凡愚でも、本願の妙力によって申せば、いつでもどこでもそのまま救われるこの道理こそ、弥陀釈迦二尊の本懷であつたとの安心決定があつたればこそなのです。この世に起る病氣も災難も、あらゆる迫害をも、素直に念仏裡中に生かされる恩寵と喜びながら、齢八十の人生を終えてお浄土に還られた法然上

人なのです。「現世を過ぐべきよう」をお示し下さつたお手本であると思います。

私はこの入院中、往生極樂の安心の尊さをしみじみと覚えました。ここは山あいの谷川を臨む病室ですが、自然の移り変わる一日一日、否一秒一瞬の天地の妙美に、極樂を想い、今現在説法の妙音を耳にし、五欲に振りまわされていた五感五境の一切が、お念仏の中に昇華されて、痛みも煩いもみ光りに溶け、なごんでいます。こんな私でもお浄土にまいって不退転と摂取をいただき、さらに一生補処の仲間に加えていただける教えを、と喜び、一念に一度の往生を当てて下さることを信じ、一息一息おぼろげながら、病み患う同行と共に念仏をいたしております。往生極樂の念仏は、現生をも明るく力強く生かされることを深く喜ぶと共に、住職四十余年、今引退して拙なかつた教化の跡を振りかえり、濟まなさど恥じらいに病床にあって念仏を申させていただいております。

花 ま つ り



(東京都江東区三好円通寺住職)

ご 後 とう 藤 しん 真 ゆう 雄

「花まつり」というよび方で、仏生会が行われるようになったのは、恐らく明治の末頃からであろう。四月八日を釈尊の御誕生日として、仏生会、或は灌仏会の名で行事が行われたのは、中国では早く後趙(西紀三〇〇年)の石勒が児の為に発願して灌仏を始めたことが伝えられていますし、法顯の仏国記によれば西紀四〇二年頃すでに西域地方、ウテン城において国を挙げての仏生会大式典が開かれていたことが記録されています。

我が国でも推古天皇十四年(西紀六〇六年)四月八日に

諸寺で齋会が行われたとあり、大安寺寶財帳にも「金灌仏像一具」と記され、現に東大寺に奈良時代の誕生仏が国宝として残っているところなどを見ると、かなり早くから灌仏の儀式が行われていたことを知ることができる。特に仁明天皇承和七年(西紀八四〇年)には律師靜安によつて宮中でも灌仏会が行われ、これが毎年の行事となり、一般寺院でも広く行われるようになり、年中行事秘抄には「今人四月八日に至る毎、花を買い供養す」とあります。その後徳川時代に至つて増々盛んとなり、享保年間には甘茶の接待花御堂、さては参詣の諸人に甘茶を仏頂に灌がせたことなども伝えられています。

明治末「花まつり」の名で又々盛んになったことは高楠先生あたりの御提唱による処だとうかがったことがあります。申すまでもなく四月八日は仏教をおひらきになった釈尊が印度でお生れになった、おめでたい日であります。今から約二千五百四十年程前のことです。釈尊の父は釈迦族のラージャー(王)の位にあるスドダーナ、一般に浄飯王といわれる方。母はコーリヤ族の王家から嫁つがれたマハーマーヤ、摩耶夫人として知られている方です。マハーマーヤは夢に六本のきばのある白象が右脇に

入るのを見て懐胎せられ、十月十日の月満ちて、臨月、その当時のしきたりとして里方に戻るならわしがあったように、スドダーナ王の許しを得られて、カピラ城を出られ、お里のデバダ城へと美々しい行列を進められたのでした。丁度その中途にルンビニという花園があります。そこには「無憂樹（アソカ）」という美しい花が、今を盛りと咲き乱れておりました。マヤー夫人は、そのあまりの美しさに、車から降りて、満開の花で枝もたわわにたれ下った一枝に右手をかけられた時、釈尊をお産みになったと伝えられております。

天は甘露の雨ふらし、地は万葉の花をもってこれを祝福したと經典は述べております。その日が四月八日だったのです。

お生れになった釈尊は、東西南北に七歩づつ歩まれて、天地を指し、「天上天下唯我独尊」といわれたという伝えは、多くのの人々の間によく知られておることです。

この時のお子様こそ三十五歳で成道せられ、八十歳クシナーラ城外鶴林涅槃に至る、御一生を私共人類の為に、弘く仏教をお説きになって、全世界の人々の心に、正しい智慧と温い慈悲をおさづけになった釈尊でありま

す。二十五世紀に亘る今日迄、そのおさとしは長く伝えられて、私共も今猶その恩光に浴しているのです。仏教の信仰の厚かった阿育王は即位の二十年親しくこのルンビニを訪れて、大聖の生誕を祝福し、記念の為に石馬石柱を建て、併せて村民の租税を減免した、碑文が残されている。私共は共に本日のおめでたい日を心から祝福いたしますと共に、これが「花まつり」として単なる「おまつり」に終ることなく、毎日の私達の生活に深い反省と、強い生き甲斐を見出すことにつとめたいと存じます。

もとより人間釈尊の誕生が実際に伝えられるような不思議な現象をあらわしたとは考えられませんが、後世釈尊を尊敬し、慕う余り神格化した宗教的な表現となったことでありましょう。白い象は古くから慈悲と平和の使者と言ひ伝えられています。ここに釈尊が一生を通じて示された、広大な慈悲の精神が端的に表現されており、生きとし生けるものにあわれみをかける精神こそ、仏心であり、大慈悲心であります。更にこれによってこそ自らの生命に対する本当の尊さを見出すことができ、この貧しき地上にも限らない喜びを見出すことができると存じま

す。東西南北に七歩あゆまれたという伝えは、欲や、いかりや、愚痴によつて起る六つの迷いの道を踏み越えた世界、或はさとり智慧を助ける七種の修業、即七覺支を表わしたお姿とも、或は当時印度の古い信仰の中にあつた七天を意味するともいわれていますが、いづれにせよ、その世界こそ、天上天下に恥じざる世界であります。唯我独尊とは、すべての人の夫々に尊い個性を持っているのです。生きてゐる以上夫々に尊い、他に代えられない意味を持つてゐる事を示されたのであります。人命尊重の根本理念はここにあります。私共は姿、形の違ふように老若男女、職業、境遇、才能、皆夫々に異つております。然しみな夫々に替え難い尊い仏性をもつてゐるのです。釈尊はどんな人でも、一人で生きて行けるものはない。すべてのものは、もちつもたれつであるという、「諸法無我」という大きな正しい智慧をお示し下さいました。

天地を指したお姿は、智慧はあくまで高く、慈悲はあくまで深いお姿であり、又常に中道を説かれた釈尊のお姿であると拝します。甘茶を灌ぐ行事は、經典に伝える甘露の雨をふらしたことになるから、甘茶をかける作法が

生れたことと思います。「アマチャ」とは梵語の (Amṛta = 不死とか甘露の意) から来たと思われれます。

この四月八日の花まつりに子供達を中心にして楽しい一日の行事といたして参りますことは、幼ない児童達をして、釈尊の如く、強く健かに、かしこく育つように、今己にうけたこの生を完全な人生への歩みにと導くところに意味があることと思います。

もっと大切なことは、釈尊も私共と同じ地上に人間として生を得られ、私共と同じような、苦しみも、悩みも一切知り尽くされたのです。そして大慈悲の教えは、私のような凡夫も念仏によつて必ず救つていただける浄土教の教えは、この釈尊によつて説かれ、教えられたことを忘れてはならないと思います。

御誕生の日に、誕生仏に甘茶の甘露を灌ぎ釈尊のお徳にあやかると共に、仏教の本当の精神を、平等と平和の精神を、自らの生活の深い反省の中に、正しい強い生活の実践の中に進めまいってこそ、花御堂の色とりどりの美しい花園にも増した、美しい、なごやかな世界を造ることができると共に、念仏の信仰のいよいよ深くなつて来ることを信ずるものであります。

御忌会によせて

—すみぞめの祖師をしたいつつ—



かね だ めい しん
金 田 明 進

(茨城県取手市白山前弘経寺住職)

みかどより御忌を修せよとのりいでて四百五十余年
つとめし

つとめです。

今私は御忌会の中に思い浮べる心もちを、つたない
「うた」でしるすことにいたします。

さくらさく知恩の庭の回廊にみ名をとなうる善男善
女よ

大永四年後柏原天皇が法然上人の御命日に知恩院で毎年法要をつとめ、これを御忌と名づけよと、宣らせられて、既に四百五十余年になります。他の宗祖にもない尊いことです。昔は御正當の正月二十五日まで七日間つとめられたのですが、明治初年から四月二十五日までの七日間、陽春につとめられるようになりました。御忌会は浄土宗では総本山知恩院でつとめられますが、増上寺でもその他の各大本山や、全国の浄土宗寺院においてもつとめられています。元祖法然上人への御報恩の大事なお

絢爛豪華というか、御忌会の知恩院はまことに衆僧が御導師を中心に金欄の御袈裟を身にまとい、数百人の行列が大殿へ向ってつづきます。これを拝む善男善女は、あのうぐいす張りの回廊にみちあふれてお念仏をとなえます。

御忌なればただありがたく口ずさむなむあみだぶつとひざまづくひと

御忌中は僧俗ともにひとりでお念仏が口からもれて出ます。場所が御本山であり、御廟のもと、八百年も流れたえぬ吉水のお念仏は、ひとりでにその座につらなる者にナムアマダブツさせずにはおきません。

ひたすらに慕いまいらすすみぞめの祖師たたえます御忌会の春よ

それは皆法然上人をお慕い申すからです。法然上人は「すみぞめの祖師」とも申し上げます。金欄のころもおつけになりませんでした。墨染の衣に風色のお袈裟、そしてお珠数をつまぐってお念仏申されている、あの法然さまをお慕い申す御忌会なのです。

さはあれどすみぞめのころもみなまとう御忌をつとむる世にてありたし

「さくらさく京の絵巻や御忌まいり」、まことににぎやかな、晴やかな、東山すそ華頂山の御忌法要ですが、法然上人のお心もちを思い、お姿を拝みますとき、われわれも、質素な姿で御忌をつとめたいと思います。

ひとはみなおごり暮せる今の世にねずみの袈裟に師のかげをしたう

法然上人は万民にお念仏の道をおすすめになりましたが、御自身は「烏帽子」も着ざる法然坊と仰せられて、世の名位にはまったく無頓着なお方でした。戦後国民の衣食住がみなおごり、質素儉約の風風が失われた今、法然上人に学ばねばならぬと思います。

入寂という言の葉はしずかにてわがむねにしむ祖師のみすがた

建暦二年正月二十五日、法然上人はお亡くなりになりました。入寂せられたとも申します。だが、仏教がいう入寂とはほんとうの静けさに入らせられたことで、それ

は法然さまが私共の胸の中にいつもしずかにお拜まれま
すことをいうのです。亡くなられる三日前の正月二十三
日には、浄土門のものは誰でも毎日拝読する一枚起請文
をかき記され、ハッキリと私共の進むべき念仏の道を示
されました。

寂滅は吹く風やみてあかあかと光りかがやくともし
びのさま

人はみなこの世をいつか去りゆく。法然上人も世を去
られました。しかし形あるものはいつかはやぶれ去るこ
とを仏教は諸行無常とおしえ、しかもそれは寂滅為樂よ
とおしえています。寂滅とはただ失われ亡くなったとい
うのではないのです。邪魔ものがみんななくなつて、本
当の姿が現われるのを寂滅といいます。そこが極樂の風
光なのです。まさしく法然上人はその極樂におかえり
なつたのです。

寂尊も元祖もおなじ八十年^{やそとせ}の世寿を示して今に生き
ます

お釈迦さまも法然上人も同じく世寿八十歳でお亡なり
になりました。お釈迦さまはクシナガラ^{クシナガラ}の沙羅双樹のも
とで、法然上人は今の華頂山知恩院のある所、吉水の庵
で亡くなられたと承ります。私は先ごろ印度クシナガラ
の釈尊御入滅の地を親しく参拝しました。八十歳の御高
令まで各所を歩き巡つて法を説かれたお釈迦さま、ただ
涙の中にそのねはん寺を拝み沙羅双樹をなでるのでし
た。法然さまもそうです。あの華頂山の御廟に参ると胸
にジンとくるものがあります。御忌の頃は御廟の裏山に
小鳥鶯が鳴いています。拝所にのぼつてお念仏をさせてい
ただきます。御廟の方から、お声がかきこえてくるよう
です。たとい刑に処せらるゝとも念仏を廃することはできな
いと、命をかけて配所に向われた元祖さま、京にもどら
れて僅かな年月、八十歳の御生涯でした。でもお釈迦さ
まも元祖さまも、共に今に生きて念仏信仰の人々を導い
て在すことを、つくづくありがたく思うのです。

とかくわがおごれるところにつきささる一文不知の
遺訓とうとし

私どもは念仏にあけくれすべき上人のお弟子であります。しかし、つい高慢心や名譽欲をもち、心おごることがありがちです。一枚起請文の「一文不知の無智のともがらに同じうして」というおさとしを、しみじみ味うと、するどくわが心を打ち打たれます。愚鈍のお念仏が法然上人の大事なおさとしです。

若き人満堂の御忌につらなりて若き念仏をたのもしくきく

その日は宗門学校長がお導師らしい。本堂を埋めた千余の高校生、声高らかに念仏をとなう。たのもしい光景である。私どもはいつも若き人々の念仏を期待し、心がけている。今満堂の若き学徒が合掌し念仏する姿を目のあたりみて、感激にたえなかったことでした。

幼き日母とつとめし念仏のお百度まいりを想う老僧

私の母の命日は四月二十日です。祖山にお世話になっ

ていた頃、いつも御忌中に母の命日を迎えて、奇しき因縁の現在をありがたく思い、御忌の法座に母を想ったものです。幼くして死別した母でしたが、母は病父のために勤めよりかえって、近くの浄土宗の寺へ秋の夜の冷えすむ中、熱心にお百度まいりに出かけ、声をかぎりに念仏していました。貧しくもかなしい私の幼き日のことです。

この母の念仏が今日の私に育ててくれたのです。母の命日、祖山の御忌法要、その座につらなる私はもう七十歳に近い老僧でした。

法を説く祖山の高座に登りいて聞き入る中に母のかげ見ゆ

それから私は輪番のお説教に出るたびに、聴き手の中に幼きときの母の姿が見えるようななつかしさを覚ええました。

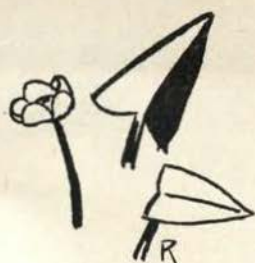
母は若くして父のあとを追って逝ったのでした。祖山の御忌、母の命日、私には法然上人に母子共に救われた思いがしてならないのです。

現代とこころのシリーズ

〔三〕

『スポーツ』のこころ

—花のもとにて—



岡野功おか いさお

(正氣塾塾長)
全日本柔道連盟強化委員

□

私は桜の花が好きだ。いや、私は、というのとは不遜で、私も、私も桜の花が好きだ、というべきであろう。人は誰でも、手のつけられないへそまがりか、あるいは桜の花によって不当に心が傷ついた過去を持つとか、よほどのことがない限り、あの桜の花が嫌いだと声を荒げるものはいないと思う。私だけがとくに桜の花が好きなわけではない。

その証拠に、和歌、俳諧をはじめとするさまざまな古典から現代に至るまで、桜花に心を移す人々がいかに多いか、ひとつひとつ例をあげる必要もない。そして桜は日本の国花である。国花であるから人々が桜を愛するのか、人々が愛するから桜が国花なのか、これまたいうまでもなく桜が人々の心に生きてきたからこそ国花なのであらう。

ふり返れば、少年時代というより、もっとずっと幼い

ころから、桜は春の花として私の心に定着していたらしい。いつ、と記憶で探りきれないほど昔から、桜は私の心に咲いてきた。

だが不思議なことに、桜はそんなに好きな花であるにもかかわらず、おりから春爛漫の花の季節を迎えているというのに、いま私はいくぶん黒ずんだ枝にたわなに咲く桜花の確固たる輪郭を全く思い出せないで呆然としてゐる。桜花はすでに完全に潜在意識として心の奥底に焼きついているにもかかわらず、花卉は何枚で、その蕊はどうなっているのかというような極めて単純なことが記憶にないのである。



私は柔道を始めた中学一年、十三歳のときから引退する二十六歳までの十数年間、フルに選手生活を送ってきた。ものごとろついでから青春の大半を柔道に明け暮れたといえるだろう。

その間、明確な枠ぎめはないが、一応、四月から十一月くらいまでのあいだが大会や遠征の日程が組まれる、いわゆるシーズンで、冬期がシーズン・オフ。したがっ

て全国的に桜前線が話題になる四月前後は、柔道マンにとって満を持していた胎動の季節なのである。

もちろん冬のシーズン・オフといったところで、大会が開催されないだけで、来るべきその日に備えて徹底練習を続けていることに変わりはない。しかし、選手生活を送っているものにとって、いよいよ出陣という意味で気合の充実するのはやはり早春なのである。

そんなわけで、春の新緑や桜をゆっくり鑑賞する情緒にじっくりひたつたことがないというのが私の通例だった。

だが本来、単純な武弁を戒めて、武道を嗜むものは、たとえ戦場のさなかといえども咲く花に感動し、鳥の声に耳を傾ける情感を持たないようではホンモノではないといわれている。

だとすれば、私は明らかに失格者だった。そして引退後も、そのまま柔道界に残り、後輩育成に専心している今日まで、実的な生活のパターンはそんなに變化していない。残念ながら今年もまたその後いくたびの桜の季節を迎えながら、十年一日の恥ずかしいとまどいを感じているのである。

□

願わくば 花の下にて春死なむ

そのきさらぎの望月のころ

武士から隠者に転じた西行法師の、この余裕たつぷりな歌を思い出すたびに、正直、うらやましいと思う。私にとって花の季節はいつになっても終着ではなく、出発のあわただしさと緊張に追いまくられる時期でしかないからである。

だが、これは私の習性なのだろうか。明らかな闘いの場にあるときは、ただがむしゃらに闘いに全力を出し尽くすというか、神経がその一点だけに集中して動かない。闘いとは勝負、大げさにいえば生もしくは死。二つに一つの二者択一の世界で花に出会っても、その時は香りも色も感じられないのである。

□

オリンピックをはじめスポーツは参加するところに意義があるという。たしかにそれはそれでよいと思う。け

れど参加して勝てば、負けるより意義があるのは自明の理だろう。もちろん負けた者が勝った者より精神的な糧をより多く得ることだって当然ある。しかし勝ち負けを競う以上、狙いは負ではなく勝利である。参加することだけが目的なら、参加資格を得たその時点でやめたとしても一向に差支えない。

試合は勝負なのである。参加が目的の鍛錬では出場資格の獲得さえ不可能になるかも知れない。最終的に最大の勝利をめざし、目標を大きくすれば鍛錬の心構えだって違ってくるはずである。

昭和四十四年、私が選手として最後の生活を送った年のことだ。恒例の四月二十九日に行われる全日本選手権を目指して調整していたが、その年、私は日本武道館のある北の丸公園周辺をランニングのコースにしていた。四月初旬、千鳥ヶ淵から田安門にかけて、このあたり一帯は満開の桜の古木が立ち並び、さらに公園内のあちこちにも花の群落があざやかであった。

その桜花の季節も例によって大会を目前にしての最後の調整期、朝に夕に走り込みを続けていた。私にとって桜が咲くのは、試合近しを教えてくれる自然のきざしに

過ぎない。そしてそれが花吹雪となって散るころ、調整は最後の最後、完全なツメの段階である。

そんな桜花の散り際のある朝、私はいつものようにラニングに出掛けた。

白々と明けそめた午前六時、人通りはまだほとんどない。その日、空は晴れていたが風が猛烈に吹きつけていた。いつもなら九段坂からすぐ田安門をくぐって北の丸公園を横断、皇居を一周するのだが、その日はコースを逆にとった。体力をつけるのが目的である以上、送り風で楽々と走るより、逆風に向った方が効果的だからである。

その日の風は、斜め上方からまともに吹きつける烈風だった。これなら砂ぼこりはあがらない。コンディショニングには最適だ、と思いながら靖国神社の鳥居を左折して千鳥ヶ淵の桜並木にさしかかった。濠の水が波立つほどに風は強い。ダッシュ。風が耳元で鳴る。さらにダッシュ。

とたんに顔全体にビンタを食ったような激痛が走った。眼の前が真白になった。風に乗って桜の花片がいつせいに私に襲いかかったのである。あの優雅な花びらが

風と連れだつとこんなにすさまじい力を発揮するとは知らなかった。

頭を下げ、歯をくいしばりながらかまわず走り続ける。するとこんどは口の中に経験したことのない香りがつんとくる。甘く、いくぶんすっぱいが淡白な、しかもちょっと苦いようにも思える独特の味である。わずかに開いた唇の間から桜の花びらが飛び込んだのだ。吐き出す。風。顔の痛み、花びらの味。また吐き出して走る。

予定のコースを走り終えると、思いもよらない疲労が残った。が、選手権目前の緊張のためか、その日は何の感慨も印象も残らなかった。

日ならずしての試合——幸いその年、私は優勝して二度目の全日本選手権をとった。緒戦から決勝戦まで決して楽な闘いではなかった。最後の一戦を闘い終わって判定を聞いたとき、はじめて私はのがカラカラに乾いているのに気がついた。

そのときである。どういうわけか、いきなりあの桜の花びらの香りが口の中いっぱいに広がったのである。続いてこんどはあの目のすさまじい桜吹雪があざやかに目に映った。幻覚である。しかし美しい幻覚であった。そ

して次に、あの時は背を丸めたまま一度としてふり仰ぎもしなかったのに、風に吹き散る桜の花びらの大群を、

春にしてはめずらしく抜けるように澄んだ空の蒼さを、なぜか私は心にはつきりと思い浮かべていた。



『茶』のころ

み　うら　じゅん　てい
三　浦　純　亭

(煎茶道黄樂幽茗流家元)

同じ茶、同じ水を使っても、なかなか一度として同じようにお茶が、はいることはございません。そのことの不思議さは、茶道に人生を見いだして半世紀たった今も、私自身がその不思議さに、毎日驚いているのでございます。結局は心なのでございましょう。

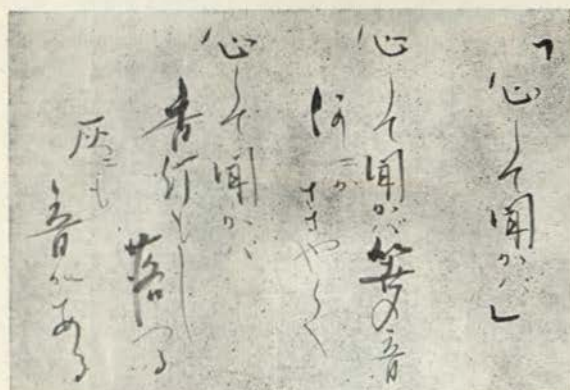
何時として同じ状態に心をとめておけぬという人間の頼りなさであろうとも思われます。それだけお茶そのものは正直だとも申せましょう。

おいしいお茶をいれてさし上げたいという素直な気持は、何人にも自信とおちつきを与えます。お茶をいれるということは、心もいっしょに入ってしまうということなのでございます。

お客様にお茶を饗応いたすにも、つねに相手をよろこばせたいとする心づかいの一念が「茶の心」であり、それに尽きると申せましょう。「喜びを与えて喜びとなす」という心の在り方なのでございます。招く人も招かれる

人も、心でものを見、心でものを聞く、心でお茶をいれ、心でお茶を味わう、そうあってほしいのでございませう。

茶を選び、水を選び、お湯をわかす心づかい、お菓子



一心して聞かば一

を選び、環境をととのえ、美しい真心の言葉でお茶を饗す心づかい、お茶を頂く人は、席主（あるじ）のこれらの厚意すべてを味わうのでございます。

全く一つとしておろそかにできない調和の精神、即ちすべてに對しての心づかい、これらの調和美の精神がお茶の精神なのでございます。

たとえ、家庭の茶の間の客に對しても、親しい家族に對しても、お台所でそくさとだしていただきたくございませう。客の前で、家族の前で心して堂々といていただきたい。

そして茶をいれる過程をも、共に楽しんでほしいのでございます。お茶をいれる者、いただくもの双方が共通の時を持ち、心の流れを一つにすることができますれば、それもまた楽しいことなのでございます。

有り合せのお菓子でも盛り方一つにも心とめれば美しくもなり、季節の草花を

一輪さえれば自然を連想し心楽しくもなるものでございます。即ちお茶とは、堅苦しいものではなく、楽しいものでなければ意味はございません。それはすべて楽しいものとする素直な心と楽しませて差上げたいとする心づかいの調和で生れるものでありましょう。

昔は、煎茶趣味と申しまして、優雅な人の遊び、文人の詩境を高める文人の茶として伝えられてまいりましたが、現在は家元制度（許し制度）の茶となりました。

姿勢を正し、心を正して茶をいれ、茶をいれるところ総て茶室であり、書を読むところ総て書斎となすという自由自在の境地で、茶を入れる手順（お手前）から人の生きる道標を学びとるというように文人趣味の茶から煎茶道として精神のお茶に移行いたしましたのが、現在のお茶のあり方でございます。

この現在の煎茶道を、編集側から平易に「茶道の心」をとのことでございますので、以下箇条書にいたし、私が長年「教えること即ち学ぶこと」より自ずと会得いたしました幾つかの心のあり方をまとめ茶道の心としてつづらせていただきました。

一、心でものを見る。

心で見れば、路傍の石にも心あり、その姿がある。

一、心で音きく。

湯たぎりの音も心で聞けば音楽があり、香灯もす灰にも音を聞く。

一、よろこびを与え、よろこびとなす。

夢見ることを知り夢を与えることを知る。

余韻のすばらしさを……。

一、無から有を生み出す心境。

雑器の中の美を見出す。

自由自在の心を知る。合理性を学ぶ。

一、貧しくとも心豊かになる。

感謝の念を知る。

一、完全でない、不完全な美。

ぬけたところのある人間の素晴らしさを感じる。

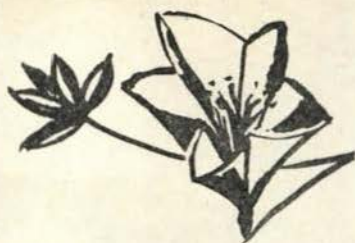
欠点も一つの美として見られる。

相手の失敗も思いやりの心で見れば、失敗も美と変る。

お茶の心とは、細い心づかいが一つになり、ハーモニ

「をおりなし、美をかもし出します。即ち「茶道の心」とは一口にいえば「和」であると申せましょう。

因みに一言つけ加えさせて頂きますと、茶道をたしな



『写経』余韻

— 仏教書道をめぐって —

むことによつてそれぞれに「茶の心」を自ずと見いだすものでございます。「茶の心」は一滴のお茶が教えてくれるものでございます。茶はまことに正直でございます。

しず　なが　こう　えい
静　永　孝　英

(東京都文京区小日向深光寺住職)

(一)

つい二、三日前、私の姪がフランスのパリ市にフランス語の勉強に出かけた。彼女はある大学のフランス語の講師をしているから、直接フランス語の空気の中に生活して、からだ全体でフランス語を身につけようとして出かけていった。

出発に際して私に、「頼まれものなのだが毛筆の小筆と中筆とを、日本からの、みやげとして持参したい。適当なものを見付けてくれ」と依頼されたので三、四本用意して持たせた。

最近、フランスでは、東洋の、特に日本の書道に関心を持ってしていると聞く。

さだかなことは覚えていないが、数年前、現代日本書道作家の作品展が、パリ市やその他の都市で開催され、

好評を博したと聞いている。

書道の美しさは、元来、「線」の美しさに由来している。

ピカソの作品も、その線の美しさによると言われているが、書道美と相通するものがあるであろう。パリ人が毛筆を、日本のみあげに持って来てくれと、依頼した理由のなにがしか判るような気がする。

(二)

さて、仏典はもとほ、西域地方の横文字の梵語で書かれている。その横文字の梵語が、中国にもたらされたのは何時かという点、後漢明帝十年（仏滅五五〇年、西紀六七年）に、印度僧提摩騰、竺法蘭が、「仏説四十二章經」を当時の都洛陽にもたらしたのが、伝来の最初であるといわれている。

その「横」文字のお経は、西域から来た数多の仏僧によつて「縦」に書かれた中国語のお経に、翻訳されたのである。

その際、翻訳僧が使用した筆記用具は、恐らくペンであつただろう。

その当時、中国では既に毛筆は使用されてはいたと思うが、訳経僧が西域人であるので、その地方の手なれた筆記用具を用いたであろう。

西域の仏僧は、どんな筆記用具を用いていたか。彼等は多分、ペンに類するものを使用していただろう。印度カジュラハにある古代遺跡彫刻の「手紙を書く婦人」の手に持っているものは、ペンのようなものである。

金属ペンがまだ使用されていなかった古代では、鳥の羽毛の軸の根元のところを、ななめに切つて、それに黒汁をつけて書いたか、または細竹か、葦の軸を斜に切つてそれで書いたか、あるいは割箸のような細長い棒切れの先を、篋状にして、横文字の梵典を書いたであろう。現在、われわれの周辺に伝わっている悉曇（しつたん）を見ると、この辺の様子が判るような気がする。

そうした横文字用の筆記用具で、縦文字の漢書を書けば、どんな、すがたの文字ができるだろうか。

多分、横線画が細く、縦線画が太く、書かれるだろう。

西域からの訳経僧は、多分、このような、いつも使いたれた筆記用具を用いて、横文字経を、縦文字経に翻訳して書写していたであらう。

(三)

中国史で、漢が亡んで、その後、隋、唐の時代になり、訳経、およびそれを伝播する写経の最盛期をむかえることになる。中国仏教の非常に栄えた時代になる。

訳経は、初期は主として天竺僧によってなされていた。仏図澄(後趙)、鳩摩羅什(後秦)、道安(秦)、法果(魏)等の西域の高僧が、皇帝に招かれて、所謂、勅命で訳経に従事していた。

もちろん、その後は中国僧が訳経もやり、伝道に、研修に従事し、隋、唐の全盛期には、中国仏教としても全盛期を迎えたのである。

この全盛期の中国仏教は、梵典を中国語訳したものを、基にして展開されている。

その当時の中国僧は、直接、梵典に触れずに、中国語訳の經典を研究して、そこから中国独自の天台教学や、

華嚴教學を展開していった。立派な、誇るべき、学ぶべき態度である。

思うに、結果論的な物のいい方をすれば、仏典訳経、写経の技法が、中国の毛筆によって書写する技法に、強い影響を及ぼすほどに、盛んに西域僧により翻訳写経が行われたのではなからうか。

初唐の「歐陽詢」の書風の中にもこのことが読みとられるような気がする。即ち中国毛筆書きの技法に影響を与えるほどに、さかんに、仏典の訳経写経が行なわれたのだろう。

(四)

宗教関係のものは、どうしても伝統を重んじ、保守的である。

横文字の梵字經典を、縦文字の漢字經典に翻訳する際西域筆記用具をつかって書かれた文字の形態を、大切に伝承し持ち伝えて行く傾向が、それである。

私は、天平勝宝七年の『隅寺心経』を手本に、写経を習っているが、やはりこの傾向が出ていると思う。

一線、一画、するどく、生き生きとしている。

年来、写経のことに詳しい中村素堂先生について指導をうけているが、こういうような考を持つようになった。

こうした事柄が、現代使用されている活版活字にも、何等かの影響を及ぼしているのではなからうか。

宋朝活字の形態にも、いくらかこの傾向はあらわれているが、今日、一般には一番多く使用されている明朝活字には、はっきり出ている。この活字は明らかに、横画が細く、縦画が太い。写経態的な字体である。

また、清朝活字（せいちょう活字）についても同様なことが言える。

こんなことを考えて見ると、写経の写態傾向が、現代の活版活字形態に影響を及ぼしているのではなからうか、と、いうような考えを持つようになった。

我田引水流に考えすぎると思ふかも知れないが。

(五)

私は毎日写経を続けている。『浄土三部経』を書写し

続けている。

朝、仏前で勤行念仏礼拝し、その場で左へ向きなおってそこに用意されている写経机の前に座り、勤行の一部分としてそれを行う。

二種類、書く。

最初に、楮和紙を幾枚も障子紙のように、つなぎ貼りはぎした巻紙を用意しておき、毛筆で日記のように、日付け、曜日、天候、を書き南無阿弥陀仏と虔書し、署名しておく。

次に、三枚の楮和紙を用意する。その一枚づつにお経の文句を順番に写経体で一点、一画に気をつけ六文字づつ虔書する。かくして三枚を、毎日十八文字づつ虔書写し続けている。昭和三十年頃から書き始めているから、三部経を、もう、何回も書写し終っている。

このことを、終生、続けたいと思っている。山岡鉄舟も臨終まで続けていたようだが、私も、あやかりたいと思っている。

元来、写経は、印刷に代るものとして、仏教伝播と共に発展したものであろうが、時代によって幾分、変遷が

ある。その時代の空気が反映しているのに気づく。

わが国に仏教が伝来した当初の飛鳥、白鳳時代には、仏寺が盛んに造営され、それに応じて仏典もたくさん必要になってきた。中国から伝来の請来経だけでは、まに合わず不足がちであったので、日本でも盛んに写経所を設け製作し始めた。

聖徳太子の『法華義疏』や、河内国志貴郡内で書かれた知識経である『金剛場陀羅尼経』等を拝見すると、よく判るが、『写経成仏』の思想が濃厚であって、写経の根底に全身全力、全霊を、ぶつけて書写してあるので、何か力強いものに打たれる。

たとえ、官公私設の写経所土であっても、皆、当時の人心は純粹であったから、經典そのものを仏陀であると信じて書写にあたっていたと思う。

時代が下って平安朝時代になると、だい分、ちがってくる。

「写経成仏」の信仰内容は、まだ純粹に持ち続けられているが、それに華麗さが加わっている。

『紺紙金泥経』とか、『紺紙金銀経』とかの、眼を見張らすほどの、きれいな写経典ができ、筆者自身の成仏の

ためのみならず、追善供養、回向のためのものが書かれるようになった。

叡島神社に奉納されている『平家納経』は、実に見事なものである。

当時の貴族は自身の修養のために、さかんに写経をしている。

法然上人も若き修行時代には恐らくさかんに写経されたであろう。

法然上人は、浄土宗開宗後は、宗義安心の上からは写経は、往生の助業であり雑行として捨てられた。

一般の善男、善女の信者には、本願念仏の「正定業」だけを強調して説くのでよいと思うが、プロであるお寺さんは、正定業を実行するのは当然のことながら、なお写経などを修して、念仏行を、一層、鋭角的にみがきかける必要があると思う。

それを薦める。

最初は『般若心経』あたりから始め、それから『阿弥陀経』などへ進まれるとよいと思う。

功德を積むと同時に、筆になれて、字が上手になる。

(五一、二、二五)



常光寺と福沢諭吉

|| 諭吉があるいた石だたみ ||

おお たに とし お
大谷 寿雄

(東京都品川区上大崎常光寺住職)

福沢諭吉は近代日本の傑出した思想家であり実践者であった。明治日本の歴史をつくった偉大な指導者の一人でもあった。福沢諭吉の著書は、学問、社会、教育、経済などの諸分野にわたり、『福沢諭吉全集』は二十一巻約一万四千ページに及んでいる。なかでも、『学問のすすめ』『西洋事情』『福翁自伝』などが、多くの人々に大きな影響を与え有名である。福沢諭吉が後世に残したもので、最も大きいのはいうまでもなく慶応義塾であり、大隈の早稲田とともに、今日私学の双壁をなしている。二十三歳の福沢諭吉が東京築地に開いた小さな蘭学塾は、今では文・法・経・工・商・医の諸学部を置く大学

と、付属の小・中高をあわせて、男女学生・生徒三万余人に及ぶ、巨大な学校となっている。明治、大正、昭和の三代にわたり政界、経済界をはじめ、各方面に多くの指導者の人材をおくり出しているのである。

福沢諭吉は天保五年十二月十二日(西暦一八三五年一月十日)大阪の中津藩屋敷に生れ、明治三十四年二月三日(一九〇一年)六十六歳でこの世を去っている。明治維新の年(一八六八年)には諭吉は三十三歳であり、その生涯の前半と後半を維新の境に、ほぼ半分ずつ送ったことになる。

福沢諭吉の生涯をみると、まさに幸運な人生を「独立

自尊」の精神で、自分の考える理想的人間像に事実上近づく努力をされ、それを実現された人間であつた。今日においても、先生の教えはまさに生き生きとしており、歴史上の偉人ばかりでなく、私共が学ばなければならぬあらゆる無限の激励と示唆をうけるのである。

私の寺にこの明治の思想家で指導者であつた福沢諭吉夫妻の墓所がある。場所は東京都品川区上大崎一丁目浄土宗正福山常光寺である。こんな関係で私はこの福沢先生に非常な親しみを覚える。よく人になぜ常光寺に埋葬されているのかと聞かれる。これは歴史上の事実であるが、何故先生がこの増上寺下屋敷であつた小さな寺を、自ら自分の安住の地として選ばれたかということに興味をもつた。先生に関する書物も読み、またいろいろと聞くこともできたので、ここに紹介させていただくこととした。

福沢先生は先にも書いたが、明治三十四年二月三日十六歳で逝去された。脳溢血の再発（一度六十三歳の時脳溢血に罹っている）であつた。

その死は当時の明治の人達をして、巨星を落つという感で、偉大な教育指導者を失つた悲しみに、上下すべて

に深甚なる哀悼を表したのである。

明治天皇から祭祀料一千元を下賜せられ、開会中の衆議院は「衆議院は、夙に開国の説を唱え、力を教育に致したる福沢諭吉君の訃音に接し、茲に哀悼の意を表す」との決議をなし、国中の新聞雑誌はいずれも弔詞を掲げたのである。その所説は各々異つていたけれど、国家社会に対する先生の功績の偉大なことを賞讃し、ことに明治時代の一平民として独立自主の主義をもつて生涯を一貫し、共徳義操行について一点の非難を容るべき余地なく、真に国民の儀表、社会の模範たる天下の第一人者を失つたことは、我が国にとり大損失であるということにおいて、いづれも異句同音であつたのである。

先生の葬儀は二月八日午後一時麻布の善福寺において執行され、府下大崎村の墓地に埋葬することとなつた。法名を大観院独立自尊居士と諡し、葬儀は先生の素志にもとずき、総て質素を旨とし、造花生花等の飾物は一切これをやめ、ただ棺前に香炉、位牌、銘旗、墓標および櫛三対を捧持するものであるのみで、棺前には塾員の長老が付添い、一般の会葬者はいずれも徒歩にて列を正し、その数約一万五千人に及んだ。善福寺の式場におい

ては、導師の簡単なる読経があつて、喪主はじめ一同焼香し、それより更に列を正し、大崎村の墓所において埋葬式を了したが、その葬列には一基の花もなく、葬送者はすべて徒歩にて、順路の両側に來觀せる老若男女も静肅を守つて敬意を表するなど、その葬儀は世間未曾有の厳肅にして、かつ質素なるものであつた。

當時の大崎の墓地は正福寺という寺であつたが、隣寺の本願寺をはじめ近所の寺が管理していた共同墓地のような所であつた。明治四十三年高輪の地にあつた常光寺が移転して來て正福寺と合併、正福山常光寺となり、先生の墓所を管理お守りすることになったのである。現在先生の墓所には福沢家先祖之墓と先祖の記念碑、母堂の碑（福沢百助之妻阿順之墓と刻し、側面には生死の月日並に実父、夫、子女の姓名がある）丈は二尺ぐらいの極めて小さいものである。

先生は平素から家族の方に建碑の場合には「父母と同じ大さにして貰いたい」といつていた。しかし、先生の碑をこれと同じ大きさに建て、夫妻の名を列すれば字形も自ら小さくなる。それに慶応義塾縁故の方の参拝はいうにおよばず、多くの世間の人も尋ねて來る方にも見当

らないような小さい碑では、別に案内の目標を建てねばならない。人の目に立つような立派な碑を建てることはもとよりなすべからずところであるが、墓地内にある附近の大きさと同じにするくらいは、先生の遺志をそねるわけではなからうと、現在のごとき高さ三尺五寸の碑が、一周忌に建てられたのである。夫人は先生の逝去後二十四年、大正十三年六月二日、八十歳で逝去し、同墓地に埋葬された。法名は香桂院静室古錦大姉である。先生の墓碑は正面に向つて右側に福沢諭吉、左側に妻錦阿、真中に之墓と夫妻の名が相並んで刻まれている。まことに明治の先覚者として、男女平等を唱えた先生の墓なればこそと思われる。

福沢諭吉の晩年の健康法は、門弟と一緒に郊外散歩であつた。三田の自宅から広尾天現寺、白金目黒方面まで足をはこばれ、とき折り折りの辺りにも來られた。その頃は隣りに本願寺の管理する墓地があつた。四辺が閑静で、眺望がよく、天氣の好い日は富士が手に取るように眺められたので、大變氣に入られ、自ら選定された。そして三田の竜源寺にあつた（その頃慶応義塾の分校であつた）母堂の墓をここに移され、先に書いた記念碑

福沢諭吉夫妻の墓



先祖之墓などを建てられ、生前、墓参をかねて散歩にいられたのである。

先生の墓地探しは、中津から江戸に出て来た時から適当な安住の地を心にかけて、大森まで探しに行かれたこともあったが、はからずも散歩の折白金の墓地が気に入られたのである。明治三十一年頃市区改正があり、朱引内は土葬が禁止されたが、大崎の墓地は昭和の初期まで朱引外であったので、先生御夫妻は土葬で埋棺されてい

る。

また慶応義塾幼稚舎の創立者の和田義郎先生の墓地も常光寺にあるが、先生は明治二十五年一月に逝去し、埋



同墓・品川区案内板

葬されており、福沢先生が追悼文を書いて、現在記念碑となつて残っている。

和田先生も先生と一緒に散歩され、先生と一緒に墓地を選ばれたものである。

また明治、大正、昭和と二十五年の長きにわたつて塾長をつとめた鎌田栄吉先生（文部大臣、貴族院議員）の墓地

も常光寺にある。戦後まで小泉信吉先生(小泉信三氏の父)の墓もあったが、小泉家の都合で他に移転された。

このようなわけで常光寺と福沢先生とは墓地選定の時には直接的な関係はなかったが、歿後十年、前述の通り、常光寺が、高輪の地から移転して来たことにより、墓所をお守りすることになったのである。現在墓所は品川区の文化財となっている。

毎年二月三日の先生のご命日には慶応義塾の学生・生徒はじめ、福沢諭吉崇敬の人々の墓参が一日中続く。この墓参の風習は、戦前戦後少しも変わっていない。変わったといえば、戦後女子学生の入学により女子学生の姿が目立つことである。昔から学生の内では、墓参すると学期末試験に合格し進学なり、卒業ができるといった信仰があり、塾生としての誇りが今日でも根強く残っている。まことにほほえましく尊い姿である。このような習慣は他の大学なり学校でも、そう多くはないと思う。今ここに先生の敬慕の念に篤い、塾出身の詩人の歌を掲げ、今後とも福沢先生とともに常光寺は歩みつづけていきたいと思っている。

一、諭吉があるいた石だたみ

み名を慕いて訪い行けば
上大崎の空たかく
独立自尊の聲がする

天は人の上に人を造らず
人の下に人を造らず

とぞいみじくも申されける

二、

諭吉があるいた石だたみ
朝の散歩におっしゃった

この地に墓を建てたいと
聞けばなつかしこの小径

一点の寒鐘声遠く伝う

半輪の残月影なお鮮なり

草鞋竹策秋曉な侵し

歩みて三光より古川を渡る

とぞたのしもうたわれける

三、

偉人の姿消ゆるとも

いまなお残る散歩道

友を誘って踏みゆけば

險にかぶ石だたみ

二月三日の福翁忌

大観院独立自尊居士
とぞ後の世に仰がれる



浄土教の流れ

△四▽

引くと押すのちがい

竹 たけ 中 なか 信 しん 常 じょう

(大正大学教授・文博)

— 〇 一 〇 —

釈尊はすでになく、弥勒仏はまだこの世に下生して来ないというのでは、この世に仏は存在しないことになる。人々は親を失った孤児のような寂しさでいっぱいである。そのような大衆の宗教的心情が反映した結果あらわれたのが「現在仏」である。『阿弥陀経』には東・西・南・北・上・下の六方に、それぞれ多くの仏がおおいでいることを描いている。東方には阿閼(しゆく)仏をはじめ五仏、南方には日月灯仏をはじめ五仏、西方には無量寿仏をはじめ七仏、北方には焰肩仏をはじめ五仏、下方に

は師子仏をはじめ六仏、上方には梵音仏をはじめ十仏、その他各方に無数の現在仏がおおいでになるのである。このように数多くの現在仏があらわれたということは、それだけ、民衆が現在仏を求める心が強かったことを裏書きしているといえよう。

ところが、無数に近い現在仏の中でも、特にわたしたちにとって身近に感じられる仏となると、それは西方においでになる無量寿仏すなわち阿弥陀仏だけなのである。法然上人の弟子になった熊谷直実——蓮生坊は、京都から生国武蔵に帰る際、阿弥陀仏のおいでになる西方にお尻をむけては失礼に当たるといって、道中、馬の背に

うしろむきに乗って旅をしたという話は有名であるが、なぜ、そのように阿弥陀仏は一般の民衆に親しまれるのだろうか。それには、数えれば三つのわけがある。

第一番目は、西方極楽浄土に、いま、現においてにたるということである。くりかえし述べたように、信仰の相手というものは、はっきりとした姿かたちがあって、わたしたちと同時代にあるものでなければ、拝もうにも拝めるものではない。つまり、阿弥陀仏はわたしたちと一緒にいてくださる仏であるということである。

第二番目は、仏教では人は修行すれば誰でも仏になれるというが、実際にそのことを身をもって示されたのは釈尊であったが、釈尊は亡ってしまった。ところが阿弥陀仏は、かつて法蔵という名の修行者であったのが、長い修行の結果、仏すなわち阿弥陀仏となったのである。釈尊が亡って、もう誰も仏にはなれないのではないかと諦めていた民衆の前に、成仏の可能性——人間でも仏になれるのだということをはっきり示してくださったのである。人々が喜んで、阿弥陀仏を拜むのは当然である。

第三番目に、多くの仏たちは自分が修行して自分が仏になった。そして「お前たちもわたしのよう修行して

仏になりなさい」と教えるのである。しかし、「修行して」と口では簡単にいうが、実際には大変なことである。凡人にはとてもできないことである。ところが阿弥陀仏は自分が仏になることは、自分のようにむずかしい修行のできないものたちを救いとしてやるためであるとして、その上で仏になられたのである。したがって、ほかの仏たちは、いわば「自分のため」に仏になったのであるが、阿弥陀仏は「一般大衆のため」に仏になったのである。変ないい方だが、ほかの仏たちは大衆にむかって「オイデ、オイデ」をしているのだが、阿弥陀仏は極楽からやってきて、一緒に連れて行ってくくださるのである。坐っているのは迎えには来られない。だから、浄土宗の本来的本尊阿弥陀如来は立像——つまり立って、わたしたちを迎えに歩み出そうとしている姿をしておられるのである。

阿弥陀仏がわたしたちの信仰心を満足させてくださるのには、こうした三つのわけがあるからであるが、これを外側からいうと、信仰の相手が自分とは別に（外在）しかも実際にいる（実在）ということ。人間でも仏になれるのだ（成仏の可能性）ということ。しかも自分のため

に仏になる（自力）ことから、他人のために仏になる（他力）ことになったこと。つづめていえば、仏格の外在化、実在化、成仏の可能性、自力解説から他力救済への転回ということになる。

—〇一〇—

「他力本願」というと、何から何まで人まかせにして、自分はアグラをかいて遊んでいるといったふうに思われている。世間一般ではそういう意味に、この言葉を使っているようだが、本当の意味はちがう。

「他力本願」ということのウラには、それこそ、仏教信仰の歴史を貫いて流れる大きな意味がふくまれているのである。つまりそこには「救い」ということが底流となっているのである。

仏教に限らず、ほとんどすべての宗教は、結局は、一人一人の人間の魂の救済、仏教的にいうと「安心立命」——すべての執着をはなれ、自由にして平静な心の状態——を目ざしているのである。こうした境地に至るためには、一つには自分の努力精進による方法、一つには仏または神の力によって至る方法がある。「救い」とは

こうして神仏の力にすがって理想の状態に至ること、人間の側からいえば「救われる」ことにほかならない。つまり他力によって願いをとげる——他力本願である。それなら、誰でも、黙って坐っていれば仏はすべて救ってくれるか。——そう思うのは先ほど述べたように、誤った「他力本願」なのである。仏といえども「縁なき衆生は度しがたし」である。無関係にそっぽをむいているものには、仏といえどもかかわりはない。なんらかの形で、仏と人とかかわらなければ「救済」はおこなわれない。キリスト教では、イエスが人類の罪を一身に引受け、十字架にはりつけとなった。その代償として神の恩寵が人間に通ずるようになったといわれる。浄土教においても事情はよく似ている。人の子法蔵が多くの人の代りに長い修行を経て阿弥陀仏となり、現に、西方においてになる。キリスト教では神と人の間をイエスが仲介した。浄土教では法蔵がみずから仏となることによつて、仏と人間とを結びつけているのである。

このように神と人、仏と人とかかわりがあって、はじめてキリスト教、あるいは浄土教という宗教が成り立つのである。しかも、その場合の「かかわり」方は、神

もしくは仏からの呼びかけと同時に人間の側からの「信仰」による。つまり「信ずる」ことが人間のなし得る唯一の「かかわり」方なのである。

それでは、一体、何を「信ずる」のか。神の恩寵を信ずるのである。阿弥陀仏の本願の力を信ずるのである。

他力本願とは、この「信ずる」ということがあって、初めていえることなのである。黙って、坐っているのではなく、一所懸命に「信ずる」ことが他力本願なのである。

さてここで、もう一度前に戻って考えてみたい。現在仏はたくさんおいでになるが、その仏たちは「自分のため」に仏になられた。そして、お前たちも仏にしてやるぞといわれるのである。ところが阿弥陀仏は、最初から「みんなを仏にするため」に仏になられたのである。このことが大切なことなのである。先に立ってオイデ、オイデをするのではなく、後から尻押ししてくださっているのである。引くと押すとのちがいがだが、これが宗教の世界においては大変なちがいなのである。いうなれば、自力と他力のちがいなのである。さらにいうなれば、浄土信仰の根源はここにあるのである。

法蔵は菩薩として修行した。菩薩が仏になるために修

行するには「約束」をしなければならない。前々号でも述べたように、釈尊の前生のことを描いた本生譚には、修行のために自分の体を羅刹に食べさせる。つまり、仏になるためには、自分の体を提供しようという「約束」する。これを菩薩の「誓願」——「誓い」という。ただやみくもに修行するのではなく、ちゃんとした約束を結び、それを果して仏となるのである。ところが、初めのうちは、自分で自分に約束して仏になるものが多かった。しかし、それでは一部のものだけが仏になれるにしても、肝心の一般の人々にまでは及ばない。それでは仏教は成り立たなくなる。そこで、自分が仏になるために約束をする場合、「大ぜいの人々をも救います」という一項が加えられるようになった。小乗仏教から大乘仏教へと展開する道筋がこれである。これを菩薩の四弘誓願——四つの大きな誓い、というのである。四つとは何かというと、度、断、学、証である。ひらたくいうと、大ぜいの人々を救います(度) あらゆる煩惱をなくします(断) 仏道を勉強します(学) そして立派に悟りを開きます(証)というのである。しかし、はじめの度は「衆生無辺誓願度」の度で、確かに大ぜいの人々を救うことを誓

うのだが、あとの三つはいずれも「自分」のことである。
一方、修行の方法・仕方に六つあるといわれる。これは菩薩の六度願行とか六波羅蜜とかいわれるが、それは布施(ほどこし) 持戒(いましめ) 忍辱(がまん) 精進(はげみ) 静慮(おちつき) 智慧(かしこさ)の六つである。菩薩は先の四つの誓いをすると同時に六つの仕方

修行するのである。しかし、この六つも、はじめの布施だけは他に対すること、つまり大ぜいの人々にすることだが、あとの五つはみんな「自分のため」にすることである。四つのうちの二つ、六つのうちの二つ、だけではまだまだ一般大衆のための仏教というわけにはいかないのではないだろうか。

で、作者は仏の母のことを想うのである。

花祭見聞くもの皆光り持つ

水野六山人

華鬘稚子環珞稚子や花祭

田中田士英

しかし花祭りは楽しい春の行事である。光り輝くような躍動感と、そして何よりも子供たちが中心のにぎやかな祭りなのである。

甘茶仏杓にぎはしくけたまふ

川端 茅舎

ゆれあへる甘茶の杓をとりにつけり

高野 素ナ

八大竜王が甘露の雨を降らしたように、参詣の人々はこぞって甘茶を灌ぎ合うのである。小さな誕生仏はちよいと倒れてしまう、竹の柄杓もカタカタ動いている。

花御堂もろびと散りて暮れ給ふ

日野 草城

花御堂月も上らせ給ひけり

小林 一茶

花一杯のうらかな春の一日であつた。大勢の人々が集まった花御堂も静かに暮れ、月明りが暖かい。

=俳句鑑賞=

仏生会の秀句

四月八日はお釈迦さまのご誕生の日とされている。美しい花々でしつらえた「花御堂」に「誕生仏」を安置して、「王香水」・「五色水」などの香水、あるいはいわゆる「甘茶」を産湯のように像に灌ぎかける。そして、この「仏生会」に行なわれる「花祭り」は、元来は浄土宗独自の行事でもあったが、ともあれ百花繚乱の春の到来にまことにふさわしい祭事である。

竹柄杓小さき仏にかぶせけり

藤井 紫影

誕生仏をしだけ桜が抱かうとす

京極 杜藻

右手を天上に、左手を天下に指して「天上天下唯我独尊」と大きく発せられた誕生仏も、ここでは可愛らしい小さな像である。それがまた何ともゆかしい。やはり仏も摩耶夫人の両手の中の幼な児である。

仏母たりとも女人は悲し灌仏会

橋本多佳子

女性らしい一句である。華やかな「降誕会」の喜びの中



法数術語十二カ月（四月の巻）

宝田正道 たからだまさみち

を現在地に移建したとき、この制度をしいたという。

四威儀 し いぎ

行・住・坐・臥の四つをさす。人間のふるまう一切の行動を四に分類していう。

四恩 し おん

人間の受ける四種の恩恵。その分け方にいろいろある。①父母・衆生・国王・三宝の四つ。②天地・師・国王・父母の四つ。③天地・国王・父母・衆生の四つ。④国王・父母・師友・檀越の四つ。

四力院 し かりん

敬田・悲田・施薬・療病の四院。聖徳太子が四天王寺

四箇格言 し かかくげん

日蓮が他宗を非難して言った四句の標語、すなわち、「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」という。

四教五時 しきょうごじ

釈尊の説いた教えを四種に分け、その時期を五期に分けていう天台の説。すなわち、四教は藏（三藏）・通・別・円（化法の四教）と頓・漸・秘密・不定（化儀の四教）の二種となる。また、五時とは華嚴・鹿苑・方等・般若・法華涅槃の五期をさす。あわせて「五時八教」（↓）の教判を形成する。

四句偈しくくわ

四句から成る詩偈。特に『南本涅槃經』に説く「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教」の四句をさすことが多い。

四苦八苦しくはつく

人生の苦悩の根本を生・老・病・死の四苦とし、これに愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦の四を加えて「四苦八苦」という。転じて日常一般の非常な苦しみをさす。

四弘誓願しぐぜいかん

四弘とも四弘願ともいう。菩薩が起す衆生済度のための四つの大願。すなわち衆生無辺誓願度（一切の生きものすべてをさとの彼岸に渡そう）・煩惱無量誓願断（一切の煩惱を断ち切ろう）・法門無尽誓願学（汲めども尽きぬ仏の教えすべてを学びとろう）・仏道無上誓願成（この上なきさとの境地に達しよう）と誓う四つの大決心のこと。浄土宗では、第二句の無量を無辺、第三句の誓願学を誓願知、第

四句を無上菩提誓願証とし、自他法界同利益・共生極樂成仏道の二句を加えて「総願偈」（度断知証）といい、また真言宗では、第二句の代りに福智無辺誓願集・如来無辺誓願事として「五大願」と称する。

四修ししゆ

浄土教における修行のしかたを四種としたもの。すなわち恭敬修（うやうやしく）・無余修（もっぱら他行を雑えず）・無間修（間をおくことなく続けて）・長時修（一生運）、阿弥陀仏を礼し念仏を称えること。「三心」（一）とともに浄土教修行の基本とされている。本来は仏が過去において福德と智慧を修する、無余・長時・無間・尊重の四つのしかたに名づけたもの。

四衆ししゆ

出家在家を問わず、仏教信者を四種に分けていう。すなわち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。あるいは比丘・比丘尼・沙弥・沙弥尼という分け方もあり、また、仏の説法に関する者を分けて、發起・当機・影響・結縁の四衆とする場合もある。

四生しじう

あらゆる生物をその生れ方の相違によって、胎生・卵生・湿生・化生の四種類に分けた言い方。人間は胎生であるが、餓鬼は胎・化両生にわたり、畜生には胎・卵・湿に及ぶものもある。天人や地獄の鬼は化生に属する。

四摂事ししやうじ

四摂行、四摂法ともいう。仏教実践のため人を導き入れる四つのしかた。すなわち布施（与える）・愛語（やさしい言葉）・利行（利益をはかる）・同事（協同する）の四つの方法。

四誓偈しせいのかい

四種の誓願を説いた偈文。また三誓偈、重誓偈ともいう。『無量寿経』巻上に載せる五言十一行四十四句の偈をさし、法蔵菩薩が「我建超世願」として立てたもの。浄土宗では日用の勤行などに特にしばしばこの偈を用いる。

四諦しだい

四聖諦ともいう。四つの基本的な真理。すなわち苦・集・滅・道の四諦のこと。「八正道」(↓)とともに、仏教の根本倫理を示すといわれる。

四大しだい

一切の物質を構成すると考えられる地・水・火・風の四大元素。人間の身体ももとの四大より成るという考えから、「四大不調」といえば四大の調和がうまくとれない、病氣のことをいう。

四天王してんのう

仏教および仏法に帰依する人々の守護神。持国天(東)・增長天(南)・広目天(西)・多聞天(毘沙門天、北)のこと。

四法印しほういん

万有の真理を示す四つのしるし。三法印(諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜)に一切皆苦を加えたもの。

『新刊紹介』

『仏教的生き方とは？』（浄土選書1）

松濤弘道 著

現代人の心の不毛が叫ばれてすでに久しい。そして、その乾燥した現代の人々に向けての仏教の役割についても、今や多くの発言がある。ある場合は真摯な信仰心の表白として、またある場合は難解な仏典に対する適切な解説という形をとって説かれた。あるいは、現実に行動する仏教人や現代寺院のあり方に関する批判や忠告という体裁をとって示された。こうした傾向は、世にいう宗教書ブームとも相まって、ことさら近年の東洋思想への関心から、多くの仏教書を生み出すことになったのである。もとより多くの書物が提供されることは、仏教に心を寄せる読者にとってはありがたいことであるが、それだけに内容の吟味はより一層の慎重さが要求されよう。

そうした意味で、今度公刊された本書

は、現代社会に生きる私たちの宗教的志向に対して、改めて反省と啓発とを与える恰好の一書であることを、まず指摘しておきたい。『仏教的生き方とは？』という表題のもとに、理論篇と実践篇に分かたれて構成された本書は、一言でいえば、著者の体験と豊富な知識に裏付けされた仏教的社会論である。このような評言がはたして適当であるかは疑問であるが、ともかく現代文明の複雑な様相の中で、仏教が現実のいかんを受け止められ、いかに存在しているのかを、広汎な事例と多角的な視点からの見解によってまとめようとしている。その作業はまことにひたむきなものであり、著者の宗教人としての実践感がみなぎるばかりに躍動しているといえよう。

周知のように著者松濤弘道師は、永く海

外にあって宗教活動に専念され、現在でも秀でた実践家として著名である。本書がその努力の結晶であることは言をまたないが、とくに日本文化の圏外に身を置いた著者ならではのユニークな文化史観が、東西文明に精通した見識によって自在に表明されているところに本書の真価があろう。

本書によって現代社会の精神状況の多様性を改めて認識され、仏教的な生活態度で反省と自覚をされるのは読者諸賢自身である。「肩のこらない読み物」として提出された著者の構想の評価もやはり私たち読者の心ざしひとつで決まるところであらう。

なお本書は、発足以来着実な活動をしている浄土宗出版事業協会の企画になる「浄土選書」の第一冊として刊行されたものであることを付記しておきたい。ハンディな新書判による明るい装丁の本書は、今後のシリーズへの期待を大いに抱かせるものである。

新書判 本文二八八頁

△定価 四八〇円▽

発行 浄土宗宗務庁



念佛ひじり三國志 (三)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



法本房行空が唱導する一念義は、粗雑なものだった。

彼はおのれ一身だけでこの宗教的信念を実践したにすぎない。信念というよりも、雰囲気を偏愛している。情念に近いであらう。

粗雑な行空の一念義を理論武装したのが同じ叡山南谷出身の成覚房幸西であった。

一念義とは、一念往生義のことだ。ひと声、阿弥陀仏の名号を称えただけでも必ず救われる。阿弥陀仏の大慈悲はそれほどに深いのだ、と主張する。

これと鋭く対立したのが多念義である。安樂房遵西や隆寛律師らがその主唱者だと言われた。

多念義の実体は、『四十八巻伝』が描写する安樂房が六条河原で斬首される場面が的確にとられているとみていい。

奉行ノ官人ニ暇(イトマ)ヲ請イ、ヒトリ日没ノ礼讃ヲ行ズルニ、紫雲空ニミチケレバ、諸人怪シミヲナストコロニ、安樂申シケルハ、念仏數百遍ノチ十念ヲ唱エンヲ待チテ斬ルベシ。合掌乱レズシテ右ニ伏サバ本意ヲトゲヌト知ルベシト言イテ、高声念仏數百遍ノチ、十念満チケルトキ、斬ラレケルニ、言イツルニタガハズ、合掌乱レズシテ右ニ伏シニケリ。

合掌した姿が乱れぬとか右側に倒れるとかは旧仏教の

<斬首>



前号のあらすじ

狂女兵庫を助けたのは法本房行空という蓬髪の私僧であった。行空は後に法然上人の弟子の一人となるが、美濃や尾張に居所を定めずに遊行した。「一宿の上人」と呼ばれたが、その教えは寂光土義（一念義）といわれて思想も行動も過激であった。いわゆる破戒ひじりであり、法然門下からも破門される人であった。しかし今はこの行空の行動が絵師藤原隆信にとっては驚きであった。木曾勢の乱入によって狂女に化した一人の薄幸の女を、この捨てひじりとはともかくも介抱したのである。

世は平家滅亡前夜の寿永年間、乱れる時代背景の中で着実に念仏信仰を弘める法然上人の東山の禪房のまわりにも複雑な人間模様があった。

往生相を思わせるが、この文章で注目すべき点は「高声念仏数百遍ノノチ、十念満チケルトキ……」である。つまり高声念仏数百遍は法悦へ至る前奏行為であって、そのあとにエクスタシイにも似た十念が唱えられる。

法然自身はこの多念義の方法を唱導し、彼自身も実践しているが、だからと言って一念義を排したわけではない。「西方指南抄」ではこうした法語を明らかにしている。

弥陀ノ本願ヲ縁ズルニ一声ニ決定シヌト心ノ底ヨ

リ真実ニウラウラト一念モ疑心ナクシテ、決定心ヲ得テ上ニ、一声ニ不足ナシト思エドモ、仏恩ヲ報ゼムト思イテ精進ニ念仏ノセラルルナリ。マタ信ヲ得テ上ニハ勵マザルニ念仏ハ申サルベキ也

(仮名に適宜の漢字を補う)

ひと声の念仏でも不足はないが、そのあとで仏恩報謝のために称名念仏に励むことだ、と説くのである。

要するに高声念仏が、前奏曲となるか仏恩報謝の余韻となるかの違いだけである。強いて色別すれば、ひと声と十念の問題も出てくるが、これは各人の情況によって決する。

『観無量寿経』の下品下生の項に、人が命終に臨んで呼吸困難になって仏を念することができなくなったときは、その御名を口で称えよ、と教えているのが基本となる。法然在世の当時でもこの一念義と多念義は門弟同志のあいだできびしく対立した。ともに席を同じくしない、というほどであった。

念仏を数多く称えることだけを目的する多念義は自力行だ、と一念義者は非難した。絶対他力であれば、数を積みかさねる行為で救済の弥陀との距離に遠近が生ずる

と考えるのは間違ひである。

一方、多念義者はひと声念仏を称えるだけで、以後の念仏をおろそかにし、放埒な俗生活にふける一念義を仏教徒ではない、と排撃した。

多念義者にはひじり(私僧)ながら精舎を結んで、善導大師が作った六時礼讃を声明したり、追善回向をする僧侶集団が多かった。一念義者は半僧半俗で、妻帯をしたり、俗務を営んでいた。陋巷のひじりである。つまり多念義者は既成の僧侶的であり、一念義者はより生活人的であった。

一念義の純粋な継承者が親鸞だったと言える。しかも彼は法然の一念義を忠実に守った。

一念ノホカニ余ルトコロノ御念仏ヲ法界衆生ニ廻向スト候ハ、釈迦如来ノ御恩ヲ報ジマイラセントテ、十方衆生ニ廻向セラレ候ランハ……(御消息集)

称名念仏を強く唱導しているのであって、後年の浄土真宗が主張するものとは異なっている。

真宗ノ通規ニヨレバ名号ヲ領受スルノハ信一念デ

アツテ、称名ノ一念デハナイ。

(西本願寺勸学寮編「安心論題摘要」)

つまり多念義と一念義の争は、時代をけみすとともに浄土宗と浄土真宗という教団の争点にまで拡大する。法然義と親鸞義とまで、あたかも両先学が別種の念仏者であつたかの如くに歪曲してしまうのである。

法然是生前、毎日欠かさずに七万遍の念仏を唱えたと言われる。だからと多念義者は「称名の数」にこだわる。陰陽師阿波ノ介が考案したとつたえられる日課数珠。あれは念仏を数える計算機であつた。

法然是こうした称名念仏の勵行者を愛しましたが、同時に親鸞のような一念義も認めていたのである。法然是決して狹隘な狂信の徒ではなかつた。

ところで法然の日課七万遍の念仏だが、あなた自身が唱えてみるがいい。

ナムアマミダブツ……ひと声と言うが、一遍で一秒間を必要とする。すると一分間で六十遍だ。一時間でわずか三千六百回である。

七万遍を唱えるのに何時間かかるだろうか。二十時間近い。毎日、二十時間近い称名念仏――

あり得ることであろうか。

睡眠、食事はもちろん、説法をする時間もない。法然から説法を除いたら、人間価値は半減してしまう。価値を半減させてまで、毎日七万遍も念仏を唱えさせるのか。宗教的なエゴイズムの極ということになる。

では法然はその日課七万遍を唱えなかつたのだろうか。

まさしく唱えていたのである。

大谷の禅室には、常時七、八名内外の門弟が起居していた。法蓮房信空以下、感西、証空、円親、長尊、感聖、良清などだ。後年になればこれに勢観房源智や阿波ノ介も加わるであろう。法然が彼らと同音同声したら、時間はぐッと短縮する。七人なら各自が一万遍で、三時間だ。八人なら二時間半となる。

ややこしい理屈よりも、今日残っている百万遍念仏の習俗が、こうした同音同声を実証している。みんなで声をそろえ念仏を唱え、その合計が百万遍なのである。

念仏の声するところ、そこに法然がいる。

と、法然是語った。

多念義であろうと一念義であろうと、差別はない。一人でも多くの同朋信者と声をそろえて唱える念仏こそ生

きた他力行であり、獨介孤獨、おのれ一身だけが救われようとつとめる念仏は、いかに数が多くても、ましてひと声だけでは錯誤も甚だしいのである。

二一

念仏を唱える数量について、もう少し書いておく。

昭和三十七年の四月、奈良市にある興善寺のご本尊、立像の阿弥陀仏の胎内から法然及び門弟たちの書簡断片が、突如としてあらわれた。

本堂の雨漏りがひどく、ご本尊を他処へ移そうと住職が抱き上げた途端、右腕がすっぽりと脱落した。付け根から覗きこむと、何やら紙包みが詰まっている。取り出してひろげると、源空とか証空、欣西などが発した書状類であった。

源空はもちろん法然上人。証空は西山上人で、欣西は門弟ではないが長年の同法者（没後起請文）で法然が書いている念仏ひじりである。ほかに円親も親蓮も法然の門弟とだけはわかったいるが、経歴その他が不詳の人々である。

よもやほんものだとはい、と住職も疑ぐりながら鑑定を

求めた。三年の歳月と、おびただしい数の学者が検討した結果、真正正銘のものということになった。

前にふれた欣西、円親、親蓮もそうだが、これら書状の宛名人である正行房自体が、これまでは架空の念仏ひじりではないが、と臆断されていた存在だったのである。

正行房は法然諸伝の中で、一カ所でしか登場しない。それは法然がしばしば関白兼実邸へ出入りすることに不審の念をいだいたのがこの正行房だ。法然が日ごろ説く教えとは裏腹に、貴紳頭門におもねっているのではない。すると正行房の夢に法然があらわれて、兼実卿とは前世から深い因縁があった。と説き明かすのである。

そんな場面だけに登場して、いっさい正体不明だったのである。法然以下の書状は、正行房の両親らしい遺骨の断片をくるんでいた。だいたいな遺骨を、いっそうだいたいな書状類でくるみ、阿弥陀仏の胎内におさめておいたものが、何と七百年以上を経て昭和の年代になって、陽の目を見たことになる。

時あたかも法然上人七百五十年遠忌の翌年であった。歴史上の大きな発見ともなった。なぜなら従来、法然の

真筆と思われるものは、ほんの「二十一文」しかないからである。それがここでは、

御ふみくはしくうけた万はり候ぬ。みちのあ日たことなく、くたり津かせおはしまして候。かへすくすよろこひ申候。これにはたれも所のちへちのことも候はす。又おはしまさぬ候。おほつかなくおほしめすへからす候。さて御こそて、たしかにたまはり候ぬ。かへすくすよろこひ申候。たい万てはへちのこと候。

法然の肉体が向ってくるような文章に触れることができたのである。

法然が七十歳のころ、オコリの病いに苦しんでいた当時の消息と推測された。

「この如来さまは……」

と興善寺住職は語ったものだ。

たいへん有難い阿弥陀仏だと代々言いつたえられてきた。昔、田原村にあったものを天正年間にここ興善寺に、地元民の言葉を借りれば「嫁入り」させたらしい。「有難い阿弥陀さまだから、くれぐれも大切に」という

当時の伝言だった。じつのところ、どこが有難いか、さっぱり不明だったのである。

胎内から法然上人の真筆があらわれて、ようやく「有難い」意味が判明したわけだ。

ところでその書簡類の裏面には、びっしりと「念仏結縁交名状」なるものが書きつらねてある。

僧教弁百万 佐伯氏千 僧永範六千 紀宗永千
僧聞泉十万 僧永乗十万

この源空書簡（二通目）の紙背だけでも八十三名の記載がある。面白いのは氏名の下にある数字だ。（返）と註がついているから、念仏百万返、千返という意味であろう。合計はこの書状だけでも四百九十九万二百に及ぶ。上は「僧教弁百万」から下は「女百」まである。

不思議なのは十返とか二返の微少な数字もまじっていることだ。念仏に結縁して、唱えたのがわずか「二返」とはどういうことであろうか。まことに面妖である。

前にふれた欣西書状は、近ごろ師法然の体調が思わしくなく、万一の場合のために上人の御像を作っておきたい、と正行房に相談を持ちかけている。相談とは費用の

調達である。

正行房がそれに応じたかどうかは、もちろん不明だが、応ぜられるだけの能力があった人であることは間違いない。それも独力ではなく、勧進の能力だ。

れんせい蓮生房念仏百万へん。けち江ん志万いらす。

という結縁状もある。れんせい蓮生房だから熊谷直実であろう。念仏を唱えた回数だけであつたならば、有名な熊谷直実が百万遍で、無名な清原重弘の二遍ではいかにも格差がありすぎる。

これはあくまでも推理にすぎないが、この回数は寄進額を表示したものではないであろうか。

この平安末期、平氏によって宋銭が持ちこまれ、永らく中絶していた通貨経済が復活しつつあった事実は、前にも書いた。復活したとは言え、それは未だ国政レベルでの流通ではなかった。通貨の単位も確定していなかったようである。

念仏の回数が、じつは通貨の単位として流通していたとは考えられぬであろうか。法然像の造立に、僧教井は百万に値する額を寄進し、佐伯氏が千、物部影家百、女

が百、ならば十分に理解が届くはずである。

正行房は、この尊い淨財の芳名簿をだいたいな書簡の裏に書きつらねて、父母の蔵骨とともに後世へ遺そうとしたのであるまいか。

それはともあれ、当時の念仏回教を字義のままで受け止めると、とんだ誤認をおかすこととなるし、またその回数だけが信仰の強弱につながるとは言いきれぬのである。

九条兼実はその日記「玉葉」で、やたらと本日念仏八万反とか十一万反と書き綴っている。それも法然と接する以前の記述である。

おそらくその念仏とは、「観念の念」であって称名念仏ではあるまい。どんな方法で数量を刻むのかは不明だが、こうした天台流の念仏と一線を劃した法然である。数量のみにこだわることは、法然の実像を見失う結果を招くであろう。

三

さて画人の藤原隆信は、某日、九条兼実を訪ねた。そこで法住寺合戦の顛末を聞いた。

法住寺合戦とは。

京都に乱入して支配権を握った木曾義仲には政治力というものが絶無であった。とりわけこの段階では、東西いずれかの勢力と握手すべきなのである。東は鎌倉の頼朝、西は備前路へまで後退した平家である。参謀の大夫房覚明はしきりと平家との和議を画策したが、義仲はかえりみぬばかりか、後白河法皇に翻弄されて、平家を追って兵庫に出兵してしまう。

その後白河法皇だが、すでに鎌倉の頼朝と手を結んでいた。頼朝と言うよりもその先駆として近江へ侵入していた九郎義経とである。

義経の軍勢は大部隊ではない。総勢五百程度のものであったらしい。

かつて俊乗房重源に危機を救われた伊勢路からの八風峠。泌み水がひたりこむようにして近江路へはいりこんできた。現在で言うゲリラ活動を想像すればいい。

義経の手勢には伊勢三郎義盛が代表するように伊勢者が多かった。地理に明るく、山野を存分に駆けめぐっていた。しかも調達した食糧を、飢餓に悩む京都へ持ちこみ、後白河法皇に献じて、密接な連絡を取っていた。

こうしたバルチザン戦闘にかけて義経は天才的なものを持ち合わせていたのである。やがて彼自身の命取りと

もなる法皇の信頼をこの時期に得た。法皇に愛されて、兄頼朝に無断で官位を昇格させていったことが、叛意と取られたのである。

義経のゲリラ活動に手を焼いた木曾義仲は、その兵力が京都までは攻めこまぬ、という法皇の言葉を信じて西国へ出兵する。平家を根こそぎ叩きつぶすことで、鎌倉との握手が成立すると甘い観測を立てた。

ところが備前、備中は平家年来の地盤であった。義仲の先陣行家の軍勢は水島の戦いで大敗する。司令官平重衡の采配ぶりの見事さを「平家物語」は詳述している。

一陣が伊賀平左衛門家長、二陣が越中次郎兵衛尉盛嗣、三陣が上総五郎兵衛忠光と悪七兵衛景清だった。そして四陣が重衡、五陣が知盛の本隊であった。

行家軍は三陣までは軽く抜いたが、これは固作戦で、四陣の重衡軍が強烈に攻めかかってきて、いったん四散したと見せかけて、一陣から三陣までの兵力も加わって完全な包囲攻撃だ。木曾勢は散々な目に遭い、司令官行家は舟で和泉へ遁走する始末だった。

後詰め義仲本隊には京都からの急使が法皇と鎌倉との握手を報じてきた。義仲は急いで平家と和議を結ん

で、京都へ引き返さねばならなかった。

平家は兵庫の一ノ谷城にまで進出する。都へ帰る日も遠くはない、と将兵は夢をいだきはじめる。

京都へ戻った木曾義仲が、兵力を消耗しつくしたと法皇は早断する。叡山や三井寺の僧兵を集め、北面の武士たちもまじえ、義仲をむかえ撃とうとする。

寿永二年の十一月。これが法住寺合戦である。

木曾軍と、北面の武士や僧兵とではプロと素人との差があった。たちまち蹴散らされて、天台座主の明雲や園城寺の円恵法親王（後白河法皇の実子）が戦死する。後鳥羽天皇と法皇はとらえられて幽閉される。

「木曾の兵士たちが、法皇をとらえたとき、どんな態度だったと思うか」

と、九条兼実が隆信に語りかけた。

「それは相手が法皇さまです。下馬して、大地に額をこすりつけて、新しい行在所へ、お移りを願ったのでございましょう」

「それが違うのだな。法皇の襟を掴んだ兵士の一人は大地に引きすえて叫んだそう。キツネを、大ギツネを引っ捕らえたぞ、とな」

「まさか……」

「すると、ほかの兵士たちは、その周囲を踊り狂ってまわったそう」

「田舎者どもが」

「田舎も街もない。武士の正体とは、それなのだ。天皇も法皇もない。ただの飾りものだ」

「平氏にはそこまでは……」

「平氏はわれわれが訓練したから宮廷の風になじんだが、源氏は違う。われわれも考え直さねばならない」

「と、おっしゃると？」

「すでに王は、礼拝する対象ではない。力だけの世界になりつつある」

隆信は、藤原家の統領とも言うべき九条兼実の、心の動揺を見た。しかし兼実がこの動揺からどう立ち直ろうとするのか。それはわからなかった。兼実は語りもしなかった。

この日、隆信は東山へゆく。九条邸を辞したあと、法然の禅室を訪ねたのである。

面会の約束もなく、また法然とは全く初対面である。

藤原の統領である九条兼実の動揺は、そのまま隆信の足もとをぐらつかせていた。

自分はこれからどうやって生きてら良いのであろう

〈説法する法然〉



か。沢山の人間を救っている、と評判の高い法然に道を訊こうと思ひ立ったのである。

禅室の縁先には二十人を越える男女が、あるいは立ち、あるいはしゃがみこんで、熱心に法を聞いていた。

隆信も彼らにまじって縁側に坐る法然を見た。

語る言葉よりも隆信は、まずその面貌に感動した。

画人である。思考よりも視覚が先に動きはじめる。

堂々たる体軀である。部厚い肩に据えられた顔。

不動のただすまいだ。かと言って、いかついものではない。

自然に、ごくやわらかな感触で据えられている。

とりわけその眼光は、いちずであった。いちずに何処

か遠い地点を、あるいは空の一隅かも知れない。そこを凝視して、もの静かに語り続けている。

この乱世に、これほど確信に満ちた眼光というものが

実在するのであるうか。迷いも恐れもなかった。乱世を

呪ったり悲しんだり、また面白がったりする感情の動き

が、ひとかけらもなかった。

ああ、絵筆があつたら、と隆信は悔やんだ。即刻、活

写したいのである。この不動な面貌を――

この夏に交渉を持った一宿のひじり、法本房の顔と比

較してみる。雲泥の相異である。

若さもあるが、行空は何ものかに取り憑かれた顔だった。法然には微塵もそれがなかった。

「あなた方が阿弥陀さまを礼拝すれば、阿弥陀さまもまた。あなた方を見て下さる。あなた方が、阿弥陀さまのことを想えば、必ず阿弥陀さまもあなた方のことを考えて下さるのです。それは絶対の事実なんですよ」

隆信には法然のこの言葉だけが聞こえた。周囲の男女は、ナムアミダブツと唱えながら縁先を離れ、山を下っていった。

隆信はなお立ちつくしている。

いったん禅室の奥へゆきかけた法然は、ひとり居残ったこの貴人に視線をあてた。

「何か？」

「いや……今少し」

「何か、わからないことでもありますか」

「今少し、お顔を見させて下さい」

「顔を」

「何というお立派な顔でしょう」

「私が、ですか」

「輝いています。現在のこの国で、あなたのように輝いた顔を持った人はふたりといないはずですよ」

「それは、阿弥陀さまの輝きが反射して私の顔を照らして下さるからでございましょう」

「旭將軍は、きつと暗い表情でいるんでしょね」

と隆信は木曾義仲のことを口にすべらしてしまった。

この法然とは何の関係もない話であった。

法住寺合戦で天皇や法皇を幽閉した木曾義仲は、みずから征夷大將軍となり、部下に旭將軍と呼ばせているらしい。しかし彼の運命は東からの鎌倉源氏と、西からの平家の圧力で没落を眼前にしているのである。

「これから夕方のお念仏をはじめます。良かったら、あなたもお上がり下さい。一緒にお念仏を唱えましょう」やさしい呼びかけであったが、隆信は強い綱で引きずられるようにして、禅室へあがりこんでいた。

後になって法然の手で出家得度し、戒心と法名をあらためた念仏者隆信の結縁はこの瞬間にはじまる。彼は希望どおり法然の真影を活写した。

隆信が死んだのは元久二年の二月二十七日である。腹違いの弟藤原定家は二月二十二日と「明月記」で書いてもいる。臨終の枕もとには安樂と住蓮が坐ったという。二人は声をそろえて念仏した。六十四歳であった。

二 編集後記 二

○陽春の四月、山川草木が一斉に力強い新しい躍動を開始した。学校でも新年度を迎え、大学といわず小学校といわず、新入生たちは元氣な勉学生生活をはじめた。しかし年度が改まった緊張も、「春眠暁を覚えず」というように、温順な時節柄、寝過しやいねむりの油断に化けてしまつては何もならない。もとより、うららかな春日のもとの、良寛和尚のように、

ひさかたの空よりわたる春の日は

いかにのどけきものにぞありけると詠むのも一興であろうが、やはり、いつでも身を引きしめて何事にも精一杯の努力をいたすのは、私たちに課せられた生きることの義務でもあらう。

ただ霞む春の山あり遠眼鏡

四月始まる豁然と田がひらけ

遷子

○お釈迦さまは四月八日にご生誕されたいわれ、一般に「灌仏会」、あるいは「花

まつり」の日と呼ばれているが、実はわが宗祖法然上人は、その前日の四月七日のお生まれである。長承二年（一一三三）、美作国（岡山県）久米南条稻岡庄にある押領使漆間時国邸では、その日の正午嫡子勢至丸が誕生し、その折館の両側に紫雲がたなびき、椋の木に二流れの白幡が降りてきたという。それが勢至丸誕生への祝福のきざしであった。今、かの地誕生寺では、宗祖降誕会にちなんで「勢至丸まつり」が華やかに営まれている。私たちも一日、静かに顧みて法然上人の遺徳を追慕し、その誕生のありがたさに心から感謝したい。

○さてこのたび福澤諭吉翁の菩提寺で有名な東京品川区上大崎の常光寺（大谷寿雄住職）では本堂と庫裡の落慶がなつた。この機会に今月号では、先代大谷隆雄師と当代寿雄師から諭吉翁にちなんで色紙一葉と随想をいただくことになった。快く執筆して下さい。下さつた両上人に心から感謝したい。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十一年三月二十五日 印刷
昭和五十一年四月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒103 振替東京八一八二二八七番

『浄土』教化トラクト
好評『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価180円 (〒70円)
(200部以上 単価160円 送料実費)

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

振替(東京)8-82187番 電話(03)262-5944番

漢和対訳『和訳浄土三部経』村瀬秀雄訳著

B6判 474頁 上製函入 定価2,500円
檀信徒への記念品、贈呈用に是非共ご利用下さい。
万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・注解つき

『浄土宗檀信徒用のおつとめ』

折本68頁 定価190円(100部以上一割引)
折本80頁 <小消息つき> 定価220円(100部以上一割引)

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発行所 常 念 寺

振替(横浜)8296番 電話(0465)43-1352番